巻頭言　学校文集「かしの木」に寄せて

言葉を紡ぐ

校長　成田　忠雄

二十年ぶりに片平丁小学校で再び勤めることになり、驚いたことがいくつかあります。それは、上巳の会が続いていることと、この「かしの木」文集が続いていることでした。まさに伝統校ならではのものですね。もちろん、二十年前に担任をしていたときにも、子どもたちと文集をつくっていましたが、今のように学校一冊ではなく、学年毎の文集でした。

今の時代、子どもたちもしっかり自分の考えを表現できることは大事なことです。みなさんが大人になる頃には、もっと今よりグローバルな世界になっているかもしれません。誰とでもしっかりとコミュニケーションができることは、大人に求められる資質・能力のもっとも重要なことになるでしょう。

ところで、話をすることが得意な人もいるでしょう。当然、そうでない人もいると思います。でも、そういう人は、しっかりと自分の考えを文章に書くことができれば、きちんと自分を表現できることになります。日本語は世界で使われている言語の中でも、とっても美しい文法をもった言語のひとつであると私は信じています。短い文章の中にも、情景や感情を込める表現ができるのです。

石川啄木という岩手県が生んだ歌人がいます。彼の代表作である「一握の砂」という歌集の中にこのような歌があります。

「やわらかに　柳あをめる北上の　岸辺目に見ゆ　泣けとごとくに」

やわらかに柳の新芽が緑を増している北上川の岸辺が目に浮かんでくるようだ。故郷を思って泣けといっているように…という意味になるのでしょうか。こんな短い文章の中にも，情景を表す言葉やその時の気持ちを込めることができる日本語はすばらしいです。

言葉というのは大事です。言葉は力をもっています。言葉選んで、あたかも糸を紡ぐようにして、文章を書いていきましょう。それはきっとあなたの中で宝物のような作品になるかも知れません。